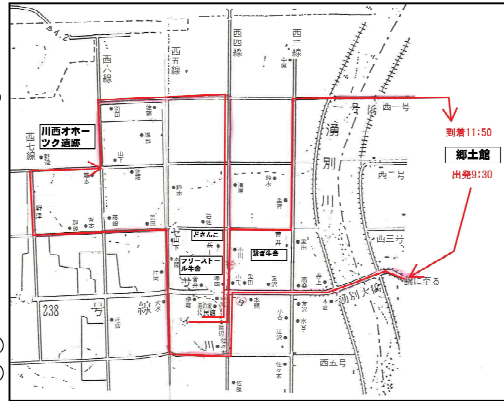


川西の旅 ～タイムテーブルと順路～

<2023年9月16日(土)>

- 8:30～ 8:50 TOM集合・受付
- 9:00～ 9:10 郷土館集合・受付
- 9:10～ 9:20 開会(挨拶、案内人紹介)
- 9:20～ 9:25 “くま像”レプリカ紹介
【出発 9:30】
- 9:35～ 9:50 馬頭観音・馬頭碑歴
(野津牧場～放牧)
- 10:00～11:10 川西オホーツク遺跡
- 11:20～11:30 トイレ休憩(川西自治会館)
(岳上牧場～フリーストール牛舎、どさんこ)
(菅井牧場～最新の繋ぎ牛舎)
【到着 11:50】～郷土館(解散 11:55)
【到着 12:00】～TOM(解散 12:05)



<酪農のあゆみ～川西>

- ・明治40年(1907)～小谷幸十郎、肉牛2～3頭飼育
- ・大正初期に乳牛飼育の記録
- ・大正10年(1921)～四号線に牛乳分離所出来る
- ・大正14年(1925)～乳牛貸付制度ができ、伊藤代助、黒田眞次郎、増田滝次
小谷幸栄が貸付を受ける→川西酪農のはじまり
- ・昭和14年(1939)～中湧別に乳業工場(酪運)ができ、牛乳の馬車や馬槽での
共同出荷がはじまる→この共同出荷が酪農組合のはじまり
- ・昭和17年(1942)～小谷幸栄がサイロを建てる(川西のサイロ第1号)
- ・昭和20年(1945)～終戦後川西全域に酪農の機運が高まり、青年層を中心に乳牛
経済検定等を組織し、多頭飼育・経営拡大が進む(一等地に牧草)
- ・昭和22年(1947)～羽田宏がブロックのサイロと牛舎を建築する
- ・昭和25年(1950)頃、次々とサイロが建ち並ぶようになる
- ・昭和38年(1963)～乳牛飼育500頭達成記念祝賀会開催
- ・昭和43年(1968)頃、全戸にミルクカーが導入されている(手搾りなくなる)
- ・昭和49年(1974)～バルククーラーが全戸に導入されタンクローリー集荷になる
- ・昭和55年(1980)～生乳の生産調整がはじまる(捨てる人も出る)

(湧別町川西開基百年記念誌「愛のふる郷」を基に)



搾乳、昭和30年頃の手搾り



ミルクカー 昭和31年1台初導入されたが、その後、普及が進み、昭和43年頃には全戸ミルクカー搾乳となる。



昭和49年バルククーラー導入される



パイプラインミルクカー

我がまち湧別町の

お宝をたずねる旅・川西

- キング式牛舎とサイロ
- 馬頭観音・馬頭碑歴



私達の郷土川西 — この地にはじめて人煙を見たのは、明治27年のこと — 高知県人が集団で入植した — 大木が鬱蒼と繁り、熊笹が人の丈ほども伸び、湿地はあちこちに存在して道(形だけのふみ分け道)をふさぎ、ここを通るには

木を伐って丸太を並べるなどして、難儀をしながら荷物を背負い、ようやく目的に着くという状態でした。

それにしても川西の地は湧別川の流域で地味が肥え、山地の入植者とは異なった農産物の収量を誇り、冷害に見舞われながらも畑作地帯として、一応安定の地でした。一方、原始河川の湧別川は、1度洪水が襲うと自由自在に猛威を振るい、切角の楽しみな収穫物が一挙に流され — 筆舌に尽くし難いものがあった —。

— 昭和15年待望の築堤が完成し、洪水に対しても枕を高くして休むことができるようになり — 終戦後の産業を検討する中で寒地農業として最適の「酪農」が取り入れられ、ようやく安定の途が開けた — 入植以来1世紀 — 不屈の開拓魂を受け継ぎながら新しい郷土の形成に努力された先輩諸公の尊い魂は今、私たちが踏みしめている大地に生き生きと活きている —。

(湧別町川西開基百年記念誌「愛のふる郷」百年記念実行委員会会長 佐久間善男の「郷土史発刊に当たって」より抜粋)



(たずねるお宝)

- キング式牛舎とサイロ
- 馬頭観音・馬頭碑歴
- 川西オホーツク遺跡

(おすすめ案内人)

→ 小川征一さん(川西在住)

→ 林勇介さん(ふるさと館JRY学芸員)



冬場の飼料確保～保存の方法として生まれた

キング式牛舎とサイロ

北海道では、晩秋からおよそ半年間、牧草などの飼料作物が育たない。乳牛を飼育して生乳を得る酪農を行うためには、冬場の飼料確保～保存手段～が必要だった。

それには、二つの方法が考えられた。

- ・1つは、凍結しないように乾燥させた牧草を、濡れないように保存すること。
その保存場所は、だいたい牛舎の二階を使用した。→「キング式牛舎」の人気。
 - ・もう1つは、水分の多い根菜などを凍結温度にまで下がらないように、地中か、半地下に置き、取り出しが容易になるよう工夫すること。→「サイロ・サイレージ」に発達。
- 酪農北海道の風景は、今日、飼料保存の方法などの進化により、大きく変化している。

(参考資料新穂栄蔵著「サイロ博物館」(北大図書刊行会発行))



軒先に突起があるキング式牛舎



川西初のブロック牛舎(S22年)



コンクリートサイロ 川西第1号

キング式牛舎

キング式は、下層にいる牛の体温や呼吸で上がった暖かい空気を、二階の干し草や敷きわらの貯蔵庫に空気孔を通して上げる仕組みの牛舎。屋根は、二階の貯蔵庫が広がるよう工夫され、独特な形になっている。

キング式牛舎は、多頭飼育の始まりを象徴する牛舎で、下の写真の牛舎(伊藤牧場)では10数頭の牛が飼われていた。



レンガ作りのキング式牛舎とサイロ



牛舎の内部(今は使われていない)



スチール製の真空サイロ

サイロ

昭和17年、小谷幸栄がコンクリートを型枠に流し込んで建設したサイロが川西の第1号だった。昭和22年、羽田宏がブロックのサイロと牛舎を建築した。その後、昭和25年頃から、次々とサイロが建ち並ぶ様になった。

馬頭観音 馬頭碑歴



馬頭観音・馬頭碑歴

町には、暮らしを支えた“お馬さん”を供養する“馬頭観音”の碑が数多くあり、敬愛を込めて“馬頭さん”と呼ばれている。移設の歴史を記した川西の“馬頭碑歴”は馬の存在の大きさと馬への深い感謝の気持ちを私たちに教えている。

川西では、毎年7月17日、多くの住民が参拝し、お供えをして、家族の無事と家畜の安全を祈願している。



「生産を高めんとする者は、まず馬を求めよ」

明治35年 — 去年生まれた牝馬を21円で購入した。 — 2年後まで仕込めば充分馬耕による営農が来ると、期待に胸が膨らむ思いである。この頃の物価は、麦1俵2円位…衣料品で木綿縞・並物1反75銭…21円の馬の価格がいかに大きな買い物かが分かる。 —

— 畑に使用するには、3歳から馴らして、本当に使えるのは4歳からだ。それに馬を使うに相当する道具もいる。畑耕しのプラウ、地均しするハロー、馬の体につける道具、胴引き、背ぐら等がある。 — 私と弟は毎日、仕事の合間に馬を引き出して踊らせては喜んでいる。そうなるか家庭はいよいよ明るくなる。 — 弟と相談して父に乞うて麦や唐黍を売って、5円50銭で馬槽を買って、馬の胴引き綱は夜業に弟と協力して造り、なるべく金のかからぬよう工夫 — 二人がかりで轡を引かせ — 薪用の丸太等も曳き寄せ得るようになってきた。兄弟の得意や、もって余るものがある。 —

— 10年を経た今日、これで一区切りついたと言えるような気がする。それは、
一つ 5町歩の附与地や開拓して遂に小川名義の土地として取得できたこと。
二つ これからの北海道農業に欠かせない馬耕営農の基礎ができたこと。
三つ 入地からの不便な家を土台付きの家に建てかけが完成したこと。
右(上)の3点の実現を見て、一区切りついでと思うと感慨一入のものがある。

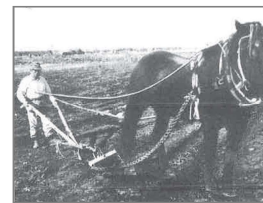
— 湧別町川西開基百年記念誌「愛のふる郷」収録 小川清一郎著「開拓の記録」より抜粋



親子馬の日光浴



デスクハロー掛け作業 昭和40年後半まで使われた



畜力カルチベーター作業 鉄製カルチベーターは、昭和の初めから昭和40年代まで使われた



ゴロに依る整地作業 昭和10年頃から、丸太木で作ったゴロを掛け、そのあとハローを架ける、これを何回も繰り返して整地した。



四輪保導車 昭和40年代頃から出廻った四輪保導車